

令和7年度 学校評価 総括評価表

徳島県立徳島視覚支援学校

学校経営方針

1 徳島県教育の基本方針

個性と国際性に富み、大きな夢や高い目標をもって、自らの可能性を高め、主体的に未来を切り拓くために果敢に挑戦する力を育む「徳島ならでは」の教育により、本県の宝である「人財」の育成を目指します。

2 徳島視覚支援学校の使命

徳島視覚支援学校は徳島聴覚支援学校と同じ校舎内に独立して併置する全国でも類のない学校として、両校が連携・協働し、「幼児児童生徒の夢と希望につながる保育・教育」を行うとともに、県内唯一の視覚障がい教育を担う学校としての役割を果たし、「共生社会の形成につながる特別支援教育」を推進します。

3 めざす学校像

- (1) 幼児児童生徒の人権を尊重し、一人一人を大切にする教育を学校におけるすべての教育活動をとおして行う学校
- (2) 視覚障がいや多様な障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援ができる学校
- (3) 視覚障がいの専門性を校内外で発揮できる学校

4 本年度の重点目標

- (1) 幼児児童生徒一人一人の様々な障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。
 - ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場での利活用を充実します。
 - ・学校と家庭・寄宿舍の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。
- (2) 幼児児童生徒のライフステージを見据え、個別の教育支援計画等を関係機関と共有するとともに、幼稚部から「自己決定」「自己選択」につながるキャリア教育を推進します。
- (3) 視覚障がい領域を対象とした特別支援学校として、全校的な体制のもと、本県の視覚障がい教育充実のため、専門性の向上のための体制を構築し、持続可能なセンター的機能を発揮します。
- (4) 地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、卒業後の進路指導を充実させ、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。

重点目標(4)	地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、卒業後の進路指導を充実させ、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
小学部の目標	他学部や聴覚支援学校等との交流及び共同学習を積極的に推進し、視覚障がい教育の理解・啓発に努める。				
小学部	<ul style="list-style-type: none"> ・本校幼稚部、徳島聴覚支援学校小学部との交流及び共同学習を、児童の実態に応じて計画、実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部、徳島聴覚支援学校小学部教員と、話し合いや連絡会を実施し、児童の実態や支援方法の共通理解を1回以上図る。 ・幼稚部とは、わくわくタイムを月1回計画・実施する。徳島聴覚支援学校小学部とは、学期に1回程度、計画・実施する。 ・交流が図れるよう、幼児児童や児童同士が触れあう、名前を確認する、相談するなどできる場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員間での児童の事態についての話し合いは、徳島聴覚支援学校小学部教員とは1回行い、幼稚部とは、学部研修を通して定期的に行った。 ・幼稚部とは、月に1回わくわくタイムを実施し、触れ合い遊びやゲームを行った。聴覚支援学校小学部とは、1回交流会を実施した。また、事前の計画がなくても交流する機会もあった。 ・交流の際には、自己紹介やペアでできる活動を取り入れたり、教員を通して気持ちを伝えたりして、活動した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・徳島聴覚支援学校小学部との交流は引き続き、継続していきたい。児童同士が自然と関わり会える機会をつくっていきたい。
エピソード	幼稚部の幼児が、七夕の前に、短冊を小学部の児童の届けてくれた。児童が書いた短冊を幼稚部の笹に飾って一緒に七夕の行事をした。聴覚小学部との交流会では、自己紹介の写真カードを交わした後、掲示したり各クラスで見たりした。事前には計画していない交流として、聴覚支援学校の児童から、玉葱の収穫や絵本の読み聞かせの誘いがあり、一緒に収穫したり参加したりした。児童が学校周辺に秋を探しにいき、聴覚支援学校の児童に紅葉した葉っぱを届け、秋のおすそわけをした。徳島ガンバローズとの交流会の前に、両校の一部の児童の間でボール遊びが始まると、自然と周りの児童も参加した。教室が同じフロアにあるため、宿泊学習や校外学習に出発する際に、聴覚支援学校の児童が見送ってくれた。廊下で「〇〇さん、おはよう」と名前を呼んでくれる、挨拶や軽く会話をする機会も増えた。				

重点目標(4)	地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、卒業後の進路指導を充実させ、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
中学部の目標	・地域の学校との交流及び共同学習を推進し、社会性を育む。				
中学部	<ul style="list-style-type: none"> ・八万中学校と交流及び共同学習を行い、普段学習している集団と異なる同年代の生徒の前で、練習してきたことを発表したり、自分のことや気持ちを伝えたり、相手の話や発表に耳を傾けたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・八万中学校との交流及び共同学習を行い、その後一人一人に応じた方法で手紙を作成して送り、次回の交流につなげる。 ・八万中学校の教員と、互いの生徒の実態を踏まえた上で実施内容やグループについて相談する機会を設ける。 ・直接交流を1回以上、手紙のやりとり等の間接交流を1回以上行う。 ・事前学習を丁寧に行い、当日、生徒に応じた方法で、交流会の中で自己紹介や活動ができる。 ・普段の授業で取り組んでいることを紹介する。場所や場面が変わっても取り組むことができるように、生徒に応じて練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度初めに、両校の教員間で、実施内容や時期について話し合った。 ・11月に本校で八万中学校1年生と直接交流を行った。生徒の実態を踏まえ、文化祭で取り組んだ劇や楽器演奏を発表した。事前に同じ場所、流れでリハーサルを行ったこともあり、自信を持って発表することができた。 ・実施後に、生徒に応じた方法で手紙を書くことができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も、生徒に応じた方法で継続して交流を行っていきたい。 ・さらに、生徒一人一人の特性やニーズに合わせた交流方法を検討し、より深い相互理解につながるようしていきたい。
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・八万中学校の生徒の発表(楽器演奏、合唱)にもじっくり耳を傾ける姿が見られた。八万中学校の生徒も、本校生徒の発表を真剣に見聞きしていた。終了後のお見送りでは、手を振りあったりハイタッチしたり「また来てね」と言葉をかけあったりする様子がみられた。 ・授業の中で点字用紙で作ったりサイクル封筒を、プレゼントとして八万中の生徒と教員に手渡した。八万中学校の生徒は興味深そうに封筒を見つめたり教員の説明に耳を傾けたりする様子が見られた。 				

重点目標(1)	幼児児童生徒一人一人の様々な障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場での利活用を充実します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
高等部職業学科の目標	国家試験受験に向けて、生徒1人1人の学力向上を図る。				
高等部職業学科	・家庭や寄宿舎で、授業の復習が効率よくできるよう、授業毎の復習教材をICT機器や生成AI等を利用して作成し当日に渡す。	・全ての座学の授業の復習教材を作成し、当日に提供する。また、全教員が生成AIを利用して復習教材を作成できるよう、1回以上の研修を実施する。	・全ての座学の授業における録音教材を配布した。生成AIを使用し復習教材については生徒の必要性に応じ作成した。 ・生成AIの研修を1回行い、復習教材作成の方法を共有した。	A	・今後は授業準備やまとめの教材、課題の作成などに生成AIを効率的に利用していけるよう活用方法を考えていきたい。 ・今年度、職業学科では、ヘルスキーパーの進路開拓に取り組んだ。次年度も企業への啓発を進め、マッサージ体験会を実施し、雇用へつなげられるよう活動していきたい。
エピソード	・復習教材については、生徒から「重要ポイントがすぐ分かる。時間をかなり短縮できた。」等の感想が得られた。生成AIを利用した教材作成についての取り組みは、今年度の全日本盲学校教育研究大会の理療科の分科会で発表した。 ・ヘルスキーパーの進路開拓の取り組みがマスコミに取り上げられ、興味を持たれた企業の方から数件の問い合わせがあり、マッサージ体験会を2件実施した。				

重点目標(1)	幼児児童生徒一人一人の様々な障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場での利活用を充実します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
寄宿舎の目標	学校や家庭等と連携を図りながら、舎生一人一人の障がい特性と教育的ニーズを把握し、社会参加や自立をめざした生活指導・支援に取り組みます。					
寄宿舎	<ul style="list-style-type: none"> ・学校や家庭等と連携し、舎生一人一人の実態や支援方法等の情報交換を行い、舎生の教育的ニーズに応じた生活指導・支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・舎生の実態や支援方法、教育的ニーズ等の把握のため、寄宿舎指導員が、学校のケース会や学級懇談に参加して情報共有を行う機会を年間7回以上設ける。 ・学齢期の舎生は、知り得た情報を元に一人一人の実態や教育的ニーズに応じた目標を、年間1つ以上設定する。 ・専攻科の成人舎生とは、学期に1回以上面談の機会を設け、生活上のニーズを把握し、必要な合理的配慮を提供する。 ・寄宿舎職員会等を通して、週1回程度、舎生の実態等について指導員間で共通理解を図り、統一した指導・支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校ケース会に5回、学級懇談に2回、年間のべ7回参加し、情報共有を行った。 ・学齢期の舎生の実態や教育的ニーズに応じた目標を、年間に1つ以上設定した。 ・専攻科舎生に対して、学期に1回、面談を行い、生活上のニーズに対応した。 ・週1回以上、舎生の情報を指導員間で共通理解し、統一した生活支援・指導を行った。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・生活指導やQOLの向上のために、学校や家庭の協働性をすすめることが課題となる。そのためには、学級懇談に参加するだけでなく、学級担任や保護者と、日頃からコミュニケーションをより密に取り、連携していきたい。
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・専攻科舎生の面談を通して、日頃、気になっていたが言えなかったことや、改善してほしいこと等、率直な意見や思いを聞き対応することができた。(例：食事の時に、箸では食べにくいおかずがあり困っていたことから、配膳時は先割れスプーンも一緒に用意するようにした) また、見えにくさについても、どんなサポートが必要か具体的に確認ができたことで、指導員間で対応方法を共通理解し、日常の生活支援に生かすことができた。 					

重点目標(1)	幼児児童生徒一人一人の様々な障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場での利活用を充実します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
課の目標	・幼児児童生徒が達成感、自信を持って卒業式等を迎えることができるよう、式典の在り方について検討する。				
教務課	・式典が、幼児児童生徒にとって新しい学校生活のはじまりや振り返りにつながるような充実した活動になるよう、式の形態等を見直し、改善に努める。	・式典に関して、教務課内で幼児児童生徒の実態を共有し、現状を把握するとともに、改善案を出し合い、検討する(3回以上)。 ・職員会議で改善案を提案し、学校全体でよりよい式典ができるようすすめる。 ・式典の様子をホームページに掲載する。 ・学部会等で意見を出してもらい、来年度に向けて改善点など意見を集約する。	・教務課で検討し、卒業式を従来の形式にとらわれず、少人数だからこぞできる一体感のある式を目指して、配置や動線等の見直しを行った(3回以上)。 ・職員会議で新しい案を提案した。仮設営を行い、全職員で配置や動線を実際に動いた上で、意見を出してもらいながら検討を重ねた。また、花道を彩るお花を在校生と教員で共同制作し、卒業式に向けて準備を進めている。 ・卒業式後、ホームページに卒業式の様子を掲載予定である。始業式や終業式等については、ホームページに毎回掲載した。 ・各学部で改善点等を出してもらい、意見を集約し、来年度に生かしていく予定である。	A	・次年度に向けて、実施後、気付いた点等について意見を出してもらい、意見を集約し、検討していく。児童生徒の実態に合ったよりよい式典になるよう、さらに形態等を見直し、検討していく。
エピソード					

重点目標(4)	地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、卒業後の進路指導を充実させ、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
課の目標	自治体や地域住民、徳島聴覚支援学校と連携し、防災学習を行うことで、両校や地域とのつながりを深めると共に、本校に対する理解の推進を図る。				
渉外・安全課	<ul style="list-style-type: none"> ・両校の幼児児童生徒の実状に即した合同研修や避難訓練の計画、実施を通し、本校に対する理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「福祉避難所」や視覚支援学校・聴覚支援学校合同での避難訓練について徳島市防災訓練課の担当者から講習を受ける。 ・両校の各担当者、自治体や地域の関係諸機関との話し合いや情報交換の機会を年2回以上持つ。 ・防災学習の様子をHP等を通して、年2回以上発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方や、自主防災組織、両校の学校職員が合同で防災学習を行った。また、聴覚支援学校や関係諸機関と連携し、火災及び地震については避難訓練を、不審者については対応訓練を実施した。その中で、福祉避難所の概要や、警察との直通電話などについての講習を受けることができた。 ・各研修で、職員や地域の方が重点的に知りたいことや、地域の自主防災の実状を共有できるものになっているかに重点を置いた話し合いの機会を年3回持つことができた。 ・防災学習の様子を年3回、HPを通じて、発信した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との防災学習は、たくさんの参加者や学校職員との話し合いなど、実り多い内容で、貴重な機会であるため、今後も、継続していきたい。 ・両校の避難訓練を通して、見えてきた課題もあるので、再度、訓練のやり方や、両校の話し合いの機会を多くするなどして、見直しを行いたい。
エピソード	地域との防災学習には、防災士の資格所有者や、地域の学校の管理職を含む、地域の方30名ほどが集まった。徳島市の職員から、「避難所」と「避難場所」、「一般避難所」と「福祉避難所」の違いや、福祉避難所の概要などの講習を受けた。地域の方と、両校職員のグループでの話し合いの機会もあり、地域の方と防災について考える貴重な機会となった。				

重点目標(4)	地域社会・関係機関及び卒業生が参加した学校行事や、各学校・園との交流及び共同学習を積極的に推進するとともに、卒業後の進路指導を充実させ、視覚障がい教育の理解・啓発及びその取組内容の発信に努めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
課の目標	・他校との交流及び共同学習を推進し、視覚障がい教育への理解・啓発に努める。				
生徒活動課	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に配慮した行事を開催したり、他校との交流及び共同学習の機会を増やしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育祭や文化祭等の大きな行事については表現、展示、バザーの部に分かれて会を設けて話し合いをし、各学部や幼児児童生徒の実態に配慮する内容にする。 ・文化祭や授業の中で交流したり、薬物乱用防止教室やスマホ携帯安全教室等を活用し共同学習を行ったりするために、聴覚支援学校と話し合いをし、各学校の生徒の実態に応じた内容にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育祭と文化祭では、各学部学科毎に話し合いを重ね、幼児児童生徒の実態に応じて競技内容や演技、バザー等を工夫し実施した。 ・小中学部は聴覚支援学校や近隣の中学校と授業の中で交流した。高等部は薬物乱用防止教室(7月11日)とスマホ携帯安全教室(12月22日)に、聴覚支援学校の生徒と一緒に参加したり、近隣の高校の文化祭に参加し啓発活動と作品展示販売をしたりした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も文化祭を公開し、実施することができた。来年度も同様に公開したい。また、体育祭については、保護者参加型の競技について検討し、子どもと一緒に競技し、共感と学校全体での一体感を醸成したい。 ・交流及び共同学習においては、今年度と同様に、他校の幼児児童生徒と触れ合ったり、一緒に学んだりする機会を増やし、視覚障がい教育の理解・啓発に努めたい。
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・城南高校の文化祭では、高等部の生徒が白杖の使い方のデモンストレーションを行った。来場した交流先の生徒や教員、保護者に対して、スライド法とタッチ法の違いや点字ブロックの説明等を自ら積極的に行い、生き生きとしていた。 ・文化祭の表現の部では、音量の調整を工夫することにより、音を聞き取って生徒が楽しんでいる様子が見られた。 				

重点目標(1)	幼児児童生徒一人一人の様々な障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。 ・ICT教育のステージをさらに高め、家庭や関係機関との連携の場での利活用を充実します。 ・学校と家庭・寄宿舎の協働性を進めることで、学習内容の有用性を高めます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
課の目標	各学部や寄宿舎において、幼児児童生徒一人一人に合わせた教育・保育活動や生活指導を行うための研修やコンサルテーションを計画し、実施する。				
研究・情報課	・各学部、寄宿舎での研修を実施し、教職員同士が意見交換したり、新たな知見を持つことができるようにするとともに、専門性の高い外部講師のコンサルテーションを受ける機会を設け、幼児児童生徒一人一人に合った教育・保育活動や生活指導に取り組むことができるようにする。	・各学部、寄宿舎研修を年8回以上実施する。また、各学部や寄宿舎で研修したことを、学校全体で情報共有するための報告会を実施する。 ・幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを取りまとめ、社会人講師によるPTコンサルテーションとOTコンサルテーションを、それぞれ年3回実施する。	・各学部や寄宿舎において、研修計画を立て、年間8回実施した。また、学校全体で情報共有するための報告会を、2月に実施予定である。 ・各学部から幼児児童生徒の教育的ニーズを聴き取り、社会人講師であるPTやOTと連携しながらコンサルテーションを進めることができた。2月には、それぞれ3回目のコンサルテーションを実施予定である。	A	・今年度、各学部や寄宿舎で研修した内容を、学校全体で情報共有する時間を設けたことについてアンケートをとり、次年度以降の研修方法を検討する。 ・小グループでの情報共有や研修等、よりよいコンサルテーションの方法を検討する。
エピソード	・PTコンサルテーションで教えてもらった、「転びにくい身体作り」のための身体のバランストレーニングを、毎日の活動に組み込むことができた。				

重点目標(1)		幼児児童生徒一人一人の様々な障がい特性と教育的ニーズを踏まえた、質の高い教育・保育活動や生活指導に取り組みます。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
課の目標	幼児児童生徒の発達段階に応じた人権教育の充実を図る。					
人権・キャリア教育課	<ul style="list-style-type: none"> ・人権教育年間計画において、生命(いのち)の安全教育に取り組み、幼児児童生徒の発達段階に応じた目標・内容を計画、実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人権教育年間計画の様式の見直しと、生命(いのち)の安全教育を分かりやすく解説する資料を作成し、周知する。 ・全てのクラス及びHRの計画において、1項目生命(いのち)の安全教育について計画、実施されている。 	子どもの実態に応じた取り組みとなるよう、「児童生徒の誕生日に、クラスの友だちがメッセージカードやビデオレターで祝う誕生会を行う」、「着替えのときはカーテンで隠すよう指導する」等の設定例を示し、わかりにくいところは相談を受けながら周知を図り、全クラス及びHRで生命(いのち)の安全教育について計画・実施できた。	A		今後も、子どもの実態に応じた生命(いのち)の安全教育に取り組めるよう、設定例を提示する等分かりやすく解説する資料を作成する。
エピソード	「スマホ携帯安全教室」を実施し、出会い系アプリが誘拐や性被害に繋がる危険なものであることを学習した。					

重点目標(2)	幼児児童生徒のライフステージを見据え、個別の教育支援計画等を関係機関と共有するとともに、幼稚部から「自己決定」「自己選択」につながるキャリア教育を推進します。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
課の目標	幼児児童生徒のライフステージや発達段階、適正に応じたキャリア教育及び進路指導の充実を図る。				
人権・キャリア教育課	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部から高等部の幼児児童生徒の社会的、職業的自立に向け、キャリア教育全体計画をもとに、それぞれの学部学科で実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部・小学部は、個別の指導計画の前期目標を参考に、家庭の協力を得て、レッツチャレンジを実施する。80%以上の実施率を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の理解と協力を得て夏季休業中にレッツチャレンジに取り組んだが、実施率は71.4%であった。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・レッツチャレンジは、子どもが一生命課題に取り組む姿にたくさんの温かい感想をいただいた。引き続き、個々に応じた柔軟な課題設定ができるようにしていきたい。 ・職場見学は保護者・施設と連携し、進路イメージの参考となるよう取り組んでいきたい。 ・就業体験は、個々のニーズに応じた進路選択に繋がるよう、保護者・施設との連携していく。 ・就業体験は、進路実現に向けて保護者・施設との連携を充実させていく。
		<ul style="list-style-type: none"> ・中学部は、進路希望調査の実施と併せて、職場見学を行い、キャリアパスポートを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望調査を実施し、その結果に基づいて職場見学を行った。キャリアパスポートもそれぞれ作成し、発表する機会を作った。 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・高等部普通科は、就業体験や学習活動の振り返りを行いキャリアパスポートの作成をする。 ・年度末にキャリアパスポート報告会を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度初めに今年度の目標を立て、キャリアパスポートを作成した。文化祭にはキャリアパスポートから抜粋して全校生徒と保護者へ報告し、3月にも報告会を実施する予定となっている。 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・高等部職業学科は、1学期に生徒のキャリア評価を行い、1項目以上の改善指導に取り組む。 ・2学期末の評価で、全ての生徒のキャリア評価合計が上昇する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア評価を行い個々の実態と課題、指導方針を共通理解した。統一した方向性で指導することで、課題の改善がみられ2回目の評価の合計点が上昇した。 		
エピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・職業学科では昨年度に引き続き、県庁・総合教育センターでマッサージ体験会を開催し、ヘルスキーパーの啓発活動を行いました。このヘルスキーパーの啓発活動をマスコミに取り上げていただき、新聞記事を見てくださった藤田計夫商店様から連絡をいただき、11月にマッサージ体験会を開催することができました。さらに、令和8年1月に鳴門教育大学様でマッサージ体験会を開催することができました。 また、ゆめチャレでマッサージ体験会を開催し、多くの企業関係者にマッサージを体験していただくことができました。 ・PTA研修会では進路をテーマに、卒業生の保護者に協力を得て、進路選択での悩みや進路の決め手等、進路を決めるためにどのような取組をしたか話をしていただき、卒業生の保護者と在校生の保護者が繋がる機会となった。 				

【学校運営協議会でのご意見】

- ・幼児児童生徒数が少ないことから、これまでの経験を蓄積し、後から振り返ることができるような取組が必要。「以前の卒業生はどうだったか」や外部講師の指導助言などを後から参照できるようにして欲しい。
- ・視覚支援学校と聴覚支援学校の併置のメリットを生かし、教育活動につなげて欲しい。
- ・本校で「自ら選択し表現する力」を身につけることができた実績などを外部にアピールすべき。学校選択に迷う保護者に「専門的な支援がある」という理由で選ばれる学校に。
- ・教育活動に保護者の意見を取り入れたり、卒業生の進路選択から得られた情報を在校生に生かしたりする取組は非常に重要。
- ・地域の啓発につながるので、交流及び共同学習も継続して取り組んで欲しい。
- ・自分の人生を良くするために、義務感ではなく楽しんで学ぶ。「自己判断・自己決定」というキーワードはまさにその方向に進んでいると感じられた。